

## 青来有一『爆心』再読のために

畑中佳恵

### 一、はじめに

『爆心』という小説では、今を生きる人々の日常の生活の中に原爆の記憶がふつと、ほんの少しだけよみがえってくる、被爆の事実をそのまま書くのではなく、記憶のよみがえりとして書きました。

(石内都・青来有一「対談 遺された「物語」から現在へ」  
『すばる』二〇一五年八月号、一八五頁)

作者・青来有一によると、連作短編集『爆心』（文藝春秋、二〇〇六年一月）には、浦上・長崎の原爆被災やキリストタン迫害をめぐる《記憶のよみがえり》が描かれている。私たちは日常生活のなかで、忘れていた自分の過去をふと思い出すことがあり、また荒唐無稽な転生物語をフィクションとして楽しむこともある。そういう意味では耳に馴染みやすい説明である一方、この作品に

描かれた諸場面を日常の枠内で説明することは、読者にとってさほど簡単でないだろう。

今回、原爆文学研究会で『爆心』を取り上げるにあたり、作者のいう《記憶のよみがえり》とはどういうことか、改めて議論したいと考えた。そのための基礎作業として本報告では、『爆心』とテーマを同じくする他の青来作品にも目配りしつつ、単行本の意匠や各短編の描写等から読み取れることを整理した。またそれによって、浦上・長崎の記憶と人々の関係がどのように描かれてきたか確認し、読者に何が期待されているかを検討した。さらに、土地の記憶の対象化の仕方に問題はないか等、討議のポイントとなりそうな事柄について問題提起し、私見を述べている。

報告後の質疑応答では、キリスト教の教義との距離感、男女の性愛の描写が典型的か否か、虫や動物の被爆は問題化されているか、収録の順序に意味はあるか等、新たな興味深い問いも共有されたが、本稿では当初の報告内容を再現するにとどめた。なお、報告レジュメの引用文は主に脚注に記載し、敬称は省略した。

## 二、単行本の意匠から

手始めに取り上げるのは、単行本の意匠である。編集者も含めた作り手側の協同作業として、大きな方向性を読みとることができるとはならないか。

まず、単行本の表紙カバーに煙のようにもみえる厚い雲の写真が用いられていることに注目したい。これは、「爆心は肉眼で見定めることが困難な空中にある」ことを示唆しているようにみえる。『爆心』所収の短編「蜜」には、若者との不倫に奔ろうとしている美穂子がぼんやりと《ほんとうの爆心あたり》に関心を向けるシーンがあり<sup>1)</sup>、先行作品である「雪の聖地」と同様<sup>2)</sup>、「爆心はここだ」と確信されない様子が描かれていた。

続く扉は黒地で、「爆心」のタイトルがシンプルに配されている。これもまた、爆心の捉え難さ（言語で捉えられない真つ暗な闇、穴、空虚といったもの）をふまえた作りであると考えられよう。前述の「蜜」には美穂子が庭の梅の木の虚を弄る場面があった



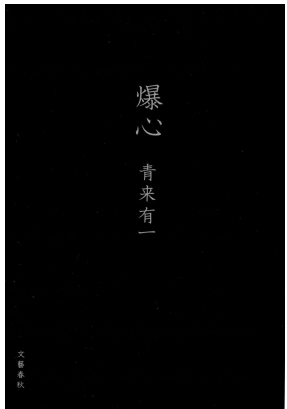
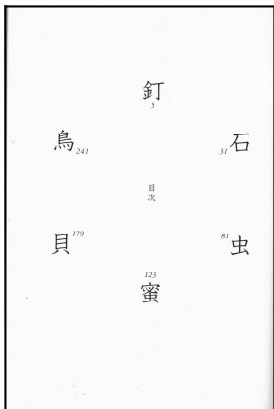
青来有一  
爆心

が、古木の虚と人間が抱く空虚を結ぶ表現は、デビュー作「ジェロ二モの十字架」（『文學界』一九九五年六月号）に遡り、その後も頻出するものである<sup>3)</sup>。この虚を念頭において改めて

表紙カバーに目を向ければ、用紙に木の表皮のような鱗状の模様が入っていることに気づく。『爆心』は書物の形態としても、虚を内包する構造になっているのではないだろうか。

次に目次タイトルについて、各短編の題名が円を描くよう配置されていることに着目したい。それぞれの短編、それぞれの言葉が、言語化されない中心に対して周縁を形成している、そんなデザインにみえる。再びデビュー作を参照すれば、

ジェロ二モ叔父（被爆者の母と浦上カトリックの父をもつ問題児で、語り手の叔父）を年に一度迎え入れる親戚たちは、自分の内部の虚を揺さぶられ互いに呻き合っていた。結末部には、自分たちが暮らす土地そのものが巨大な虚なのだという語り手の認識も描かれている<sup>4)</sup>。虚から虚への反響は、中心と周縁が決して断絶しておらず、周縁にもそれぞれの虚があり虚同士で影響し合うというかたちで表現されているだろう。中心の土地の虚と周縁の人々の虚が何らかの形で連動する光景は、「雪の聖地」（『文學界』一九九七



年六月号)や「聖水」(『文學界』二〇〇〇年二月号)にも指摘できる<sup>5)</sup>。

一九九五年頃からの青來の創作活動は、同時代と連動したものととして理解しやすい。周知のとおり、過去の大虐殺を客観的に正確に物語として語り表象することの困難は、とくにアウシュヴィッツ強制収容所における出来事をめぐり問題化されるようになった。日本国内でフランス映画『シヨアー』が上映されたのが、初公開から一〇年後の一九九五年。映画がとらえた証言の不可能性は、高橋哲哉らによってハンナ・アーレントの「忘却の穴」というキーワードとともに議論の俎上に上げられ、より一般化されるべき概念として注目されることになる<sup>6)</sup>。一方、さほど間をおかずに、表象不可能とみなすことで思考停止に陥ってはならないという点を重視するジョルジュ・アガンベンやジョルジュ・ディディエール・ユベルマンらの主張も届き始める<sup>7)</sup>。青來は、そんな同時代の問題意識と接するなかで、「浦上・長崎における二つの大量虐殺を書く」という難題に取り組んだと思われる。

ここでいったん整理すると、青來がデビュー時から抱えた課題は、表象不可能性とも関わるキリシタン弾圧と原爆被災を、しかも直接体験していない者(青來は林京子との違いについて繰り返し言及してきた<sup>8)</sup>)としてどう描くかである。その試行錯誤の結果、「表象不可能な中心は虚である。しかし、中心の虚は周縁の虚と反響というかたちで交通する可能性があり、それがすなわち土地の記憶のよみがえりである」という構図を得たようにみえる。そのとき、中心の記憶がそのままコピー・ペーストされるのではなく、「周縁の人間に中心と連動している感覚が生じ、言動に影響

する」のであれば、その感覚の正統性は問われない(あるいは問われにくい)ということにもなるだろう。

このような構図のもと、『爆心』を含む初期作品において、出来事を中心に位置しないが出来事から切り離されてもいない人々の姿がクローズアップされてきたとすれば、それらを読む者には、自分もまた出来事から切り離されていない一人であると感ずることが期待されているだろう。自分と同じように中心の権威から距離がある登場人物には、シンパシーを抱きやすいからである。あるいは、読者自身の抱える虚が感応することもまた、作品の狙いの内に入っているのかもしれない。

さらに考えてみたいのは、読者がこれらの作品を読むことを通じて周縁形成(目を向けるべき中心 $\parallel$ 虚があることを浮かび上げさせる作業)に組み込まれるのではないかという点である。青來作品において周縁はいかに形成されているか。また、読者はそれにどう関わるか。この一連の問いをめぐり今回報告したいポイントを予め整理すると、次のようになる。

- 1 土地の出来事やその記憶にとつて周縁となる各作品のなかにも、それぞれ様々な虚が仕組まれている。
- 2 中心について客観的に証言しない周縁的な人物が、自身の虚を抱えて登場し、周縁の虚に反響をひろげる。
- 3 作品間にわたつてズレながら連鎖するイメージが多く観察される。
- 4 読者はイメージの連鎖を追い、要素間のつながりをさぐつて作品理解の足場を得ようとする。また、その延長上で

信仰の問題に導かれる。

これら四点が具体的に可視化されるよう、次章では『爆心』の六編を収録順に取り上げ、関連箇所照射していきたい。

### 三、虚・周縁性・連鎖するイメージ・信仰をめぐる問い

#### 「釘」(『文學界』二〇〇五年二月)

まず梗概から述べる。隠れキリシタンの子孫である《わたし》は、天主堂がみえる祝福された土地に禁教時代から建っていた家を守る準備をしている。《わたし》の息子が新婚の妻の貞操を疑って別居となり、妄想型の統合失調症と診断され、離婚話もつれるなか妻を刺し殺してしまった。その賠償等のため、自分たち老夫婦は土地から根こそぎにされることを選んだのだという。小説終盤では、実家の離れ(信仰者で被爆者となったお良さんという親戚がかつて暮らした部屋)に一時移り住んでいた息子が、夜な夜な納戸の三方の壁板にびつしりと数万本の釘を打っていたことがわかる。それを知った《わたし》と妻は《あの釘はいつたい誰のしわざなのでしょう……》(単行本二八頁)と動揺した。

この短編における最大の虚は、息子が《あそこにはなんもなか》(二五頁)という離れの納戸だろう。そこに狂気じみた空間を作り出した息子が、神の褒美とまで思った妻を信じられなくなった理由も欠けたままであり、彼の内部の虚を思わせる。さらに、息子から信仰を問われたとき、語り手の信仰心にも虚ろな部分があることが自覚された。つまり、息子の虚は父の虚に反響したのである(後述するように、お良さんの虚が息子に反響し、さらに父親に反響したと解釈することもできる)。そんな重い役割を果たす息子であるが、長崎原爆を体験しておらず、信仰心は弱く、精神疾患のため言動に信頼性を欠くという、キリシタン迫害および原爆被災の記憶を担う者という意味でおよそ中心的とは言い難い属性が与えられた。

ズレながら連鎖するイメージとして印象的なのは、小説末尾で語り手が言及する、信仰を疑問視し妻にすぎる息子の姿と虫のようになり神にへばりつく父の姿である。両者の姿は全く同じでも正対でもない、なんとなく似たものとして示されているようにみえる。

最後に、続く五作品への伏線といえるような謎解きの仕掛けについて確認しておく。作品集の冒頭に配されたこの短編には、「納戸の釘は誰のしわざか？」という大きな謎が登場した。それに対する一つの解釈として、浦上で被爆し子ども四人を失ったお良さんという先祖が、隠れキリシタンとしての信仰心を損なわれ、離れの納戸に自身の虚の痕跡(釘や釘跡?)を残したのではないかと読むことができる。息子はそれを見つけて自身の虚を揺さぶられ、信仰と女に対する不信や憎しみをつのらせ、釘を打ち、虚を肥大させていったのではないだろうか、と。いずれにせよ、読者はこの謎かけによつて要素間の関連を探るよう促される。そして「月夜見の島」(『文學界』二〇〇二年七月号)等でも示された、偶然かもしれないものを必然と受けとめる信仰の問題へと連れ出されることになる。

「石」〔文學界〕二〇〇五年七月）

まず梗概から述べる。知的障がいをもつクリスチャン男性である山森（作中で《わし》という一人称の語り手）は、母親の死を前に、同じ信仰者で政治家になった九ちゃんを頼ろうとする。しかし、世界平和と核兵器廃絶を目標にしていた清廉な幼なじみは、障がい児の母である一女性と懇意になり秘書にしたことが明るみに出たため、辞職するところだった。山森は記者会見の行われるホテルで九ちゃんを待つが、その間に会った新聞記者に真剣に発情し、失恋を味わう。

九ちゃんに会えたものの、事態を正確に把握できずケンカ別れのようになった山森は、いつものように石になった気がする。そして、頼る者がなく家族も持てないまま中年になった自分を疎んじながら歩く浦上川のとおりで、《水ばく、ださい。あーあ、からだが燃える。》という被爆者の声や、《熱かあ、ひとおもいに殺してくれろー。おれは神さんのところに早う行きたかー。》というキリシタンの声を聞いた（七七頁）。山森は、それら石になった人々の声を聞き届けない天国は《がらんど》（七八頁）なのではないかと疑いながら、《せつくすばさせてください》（七九頁）と神に祈る。

女性の伴侶を渴望し続ける山森は、イブを欠いたアダム（彼の洗礼名）である。その意味で虚を抱える存在といえ、天国は誰もいない虚ではないかと思いつて苦しむ人物でもあった。また彼は土地の記憶の媒介者といえる一方で、知的障がい者という周縁的な属性を与えられており、権威ある証言者の位置をしめることはない。

そんな山森が辿り着くのが「神はどこにいるのか？ なぜ何もしてくれないのか？」という問いである。最終的に、疑念を抱きながらも個人的な祈りを止めない姿が描かれることで、この信仰をめぐる問いは温存されることになるだろう。

「虫」〔文學界〕二〇〇五年八月）

まず梗概から述べる。六〇年前の一五歳の時に被爆した老女・廣瀬光子（作中で《わたし》という一人称の語り手）は、「まだ、生きておるね？」と語りかけてくるウマオイの夢を見て眼を覚まし、急に誰かにすがりつきたくなる。彼女は被爆直後に（自分の意志によらず）洗礼を受け、今もマリア像に祈り語りかけている。被爆当時のことはほとんど覚えていないが、リヤカーで運んでもらっているときに足にとまったウマオイをはじめ、虫にまつわる様々な光景は印象に残っていた。当時、左足にはガラス片が刺さり、放射能のため衰弱や脱毛も生じた。そこから回復する姿を祖母がウマオイに喻えたことは、廣瀬にとつて偶然でないように思えた。

彼女は戦後に印刷所で出会った元特攻隊員の佐々木（隠れキリシタンの末裔）だけに、虫の命まで含む信仰について思うところを語ったことがあった。健康で美しい彼に惹かれた一方、同僚の尾崎の思いは受け入れられなかったが、その尾崎は変形した顎の整形手術を繰り返えし、放射能の後障害もあつたらしく自殺したのだった。既婚者となった佐々木と廣瀬は、マリアの祭壇の前で一度だけ肉休関係を結んだことがあり、彼女はその一度の過ちを悔いつつ反芻して生きてきた。

今、廣瀬のもとには佐々木の妻から手紙が届いている。思い出話を求められることに反発を覚えながら、「あの人はウマオイなのです」という分かりにくい返事を書いた。今でもリヤカーに乗っているような夢心地でいる廣瀬に、『あのひとの空虚な化身』であるウマオイは『白い無数のガラス片のようにきらきら』した精を放つ（一二三頁）。

この短編では、廣瀬（二〇八頁）、佐々木（二〇七頁）、マリア像（二〇六頁）に虚のイメージが付与されており、思い出の暴露を求める佐々木の妻もまた腹に何かを抱えていることが示唆された。そのうち語り手である廣瀬は被爆者であり、『爆心』のなかで最も出来事の中心に近い人物にみえるが、客観的な記憶を保持する者とは言い難い。なぜなら、彼女の経験は部分的かつ虫のことに偏向しており、夢見心地に反芻されるなかで幻想的なものへと改変され続けているからである。

ズレながら連鎖するイメージとしては、まず、被爆の際のガラス片が虫の精子に結びつけられていることが挙げられる。《まるで磁力で吸い寄せたようにガラスの破片が左足にびっしり集まって》（九五頁）いたとの表現から、前の短編「釘」の釘とも連鎖し、その釘が《無数の毛が生えている》（二四頁）ようにみえたことは、次の短編「蜜」のキウイの描写に繋がるだろう。

短編タイトルであり作中に頻出する虫は、信仰者、被爆者、人間、誰かの声で問うてくる者、という様々な主体と結ばれており、これまで読み手を混乱させてきた。例えば二〇〇五年の黒井千次らによる創作合評でこの短編が取り上げられた際には、虫の位置づけをめぐる三人の意見が噛み合わないという事態が生じている<sup>10)</sup>。また、

二〇一七年に『爆心』を論じた松田繁郎は、六つの連作に共通する問題点として『イメージの羅列にとどまっているのが残念だ』と評した<sup>11)</sup>。そんな論者たちの反応は、例えば虫と関連付けられた複数の対象が論理的に整理されないことを裏書きしているだろう。論理的整合性がないことは必ずしも残念でない。なにかしら似ている、ただ隣り合っている、という存在の仕方もまた、関連領域を創りだし拡大するための戦略たり得るからである。

最後に信仰の問題に目を向けると、廣瀬の祖母が「神はなぜ浦上信徒に試練を与えるのか？」という疑問を発する様子が描かれていた。廣瀬が考えるように、偶然にみえることも必然であると仮定すれば、祖母のそれは正当な問いということになるだろう。読者にとつては、問いを持続的に共有させられていくことになる。

#### 「蜜」〔文学界〕二〇〇六年一月

まず梗概から述べる。美穂子（三三歳の奥さんで、『わたし』という一人称の語り手）は、同じ教会の信徒である夫とその両親と爆心地付近で何不自由なく暮している。主婦仲間から大学生との不倫話を聞いた頃、不思議なことに自転車のブレーキがゆるんだ。そして、夕時にブレーキ音をききませながら男子学生たちの視線を楽しむようになり、今は修理を依頼した店の青年店員を誘惑しようとしている。

美穂子の家の庭になる金色の産毛のキウイは、様々なイメージを呼び起こす。梅の古木には虚があり、突くと蛇が這い出した。彼女は空っぽの自分の中に蛇が逃げ込んだ気がする。また、既に不倫している夫にも虚があると知るが放置した。義母は六〇年前

の原爆被災でキウイの柵辺りに親族の骨が散らばったことを語るが、美穂子は応答することができない。一方、彼女は自身のさかしまな心をめぐって神に応答を求め、転がった黄色いレモンを通じて答えを得るといふ神秘的な経験をしつつ、欲望にはしる。青年をキウイの木陰で誘惑したとき、原爆忌の空に透明な何かを見、マリア像のある屋内が虚のように感じられた。

虚に直接関連付けられているのは美穂子（一三七頁）、庭の古木（一三七頁）、夫（一五五頁）、マリアの祭壇のある屋内（一七八頁）である。語り手である美穂子は形ばかりの信者であり、嫁ぎ先の原爆被災の記憶を教えられても自分事とは考えられない。それでも、個人的な性欲を優先するなかで神に問うてみたり原爆忌の空に何かを見たりするという、完全に圏外とはいえない周縁の人物として登場している。

この短編に頻出するキウイは、『爆心』のなかでもズレたイメーヂの連鎖が最も可視化される例である。語られた順に挙げると、キウイはまず毛と結びつき、鉄分豊富ということで釘も連想させる。また女性器と結びつき、題名でもある蜜と結びつき、新たな信仰の対象、腐り減ぶ肉、菜園の象徴、ユーモラスな鳥、猫を酔わせるオニマタタビ、といった具合に次々と連鎖を伸ばし、イメーヂの領域を拡大している。他方、火遊びの不倫の結末が原爆被災と重なるように表現されたこともまた興味深い<sup>(1)</sup>。

信仰をめぐる「神は存在しないのか？」という短編「石」と共通する問いが、義理の両親の会話において「神は人間に對するブレーキとして機能しないのか？」というかたちに変奏され、不倫の実行がその答えであるかのような構成となつてゐる。美穂

子の認識と行為が、神はブレーキ役にならないこと、しかしそのようなかたちで神は存在するということを逆説的に証しているようにみえるのである。もつとも、断定的には描かれていないため、ここでも問いは持ち越されていくだろう。

#### 「貝」〔文學界〕二〇〇六年三月

まず梗概から述べる。四歳で肺炎のため急死した娘・沙耶香の面影が薄れていくことに苦しむ《ぼく》は、精神を病んで入院し服薬中。マンション高層に住むが、夜毎に海が押し寄せて溺れそうになっている。二月のその日は枕元にタカラガイの貝殻があり、自分の正気の証にと拾い集めた。マンション前に散らばるゴミを片づけていた長井と話をすると、彼の六七歳の妹が沙耶香と同じ八月に急死したこと、また二人が親しかったことがわかる。

長井は沙耶香の霊前で祈った後、かつて妹が城山で被爆し、祖母や兄弟を見捨てて逃げたという話を始めた。妹は当時のことを覚えておらず、一言だけ「海が押し寄せてきて、浦上の火を消したらよかとに」といったことがあつた。それは、キリシタン義民が津波に襲われた村を助けるため自宅を焼いたところ褒美の貝殻が残ったという昔語りと、ノアの方舟伝説をベースにしたものと思われた。長井は、妹と沙耶香が最後に会つたのは二人が亡くなる日であり、二人は一緒に貝殻を拾っているようだったと語る。

《ぼく》は偶然の一致が偶然でなかったと感激し、自分の貝殻を見せようとする。が、長井は《ふたりの手にはなんもなかった》（二三八頁）といい、《ぼく》が開いた掌もからっぽだった。

この短編では、拾つたはずの貝殻が実は存在しなかったという

話のオチに虚が配置されている。また、長井の妹の被爆当時の記憶も基本的に欠如しており、虚となっていた。妹は被災下の見捨て経験に苦しみ続けた被爆者として描かれる一方、呆けたことで蘇った微かな記憶は祖母による昔語りと錯綜しており、証言者としては信頼しにくい。また、彼女と同じように幻想的な海を経験している語り手は、精神バランスを欠いて入退院し服薬中という、「釘」の息子と似た状況に周縁性を示している。

ズレながら連鎖するイメージとしては、ゴミと貝殻が「拾われるもの」として隣り合い、次の短編「鳥」の原子野における拾われた乳児とも隣接していくことになる。拾われた貝殻は、「世界は繋がっており偶然の一致は必然である、という証拠はあるか？」という問いを追求する語り手にとつて重要な物証となった。しかし最終的に、それがあらずの掌は空であることが認識され、証拠があるとなれば虚のなかである、という結びになっている。よつて、この信仰と関わる問いについても確証は与えられないままといえる。

### 「鳥」〔文學界〕二〇〇六年七月

まず梗概から述べる。小さな印刷会社に勤める《私》は、被爆直後に原子野で拾われたため本名も生年月日も両親もわからない。自分が何者であるか考えずに淡々と生きてきたが、被爆体験記の執筆を勧める人がおり、現在それに取りかかっている。

養父母と暮らした家は居心地が悪く、《私》は養父との確執が理由の一つだと考えている。復員兵だった養父の満州での日々は謎のまま、戦後は賭け事にのめり込んでいた。中学生だった

《私》に浦上天主堂の神との繋がりを示唆したのも養父であり、現在の私は《幼い私は神を知らぬうちに捨ててしまったのではなにか》(二八二頁)と考えるようになっていた。彼を拾った養母は、乳飲み子だった彼と白い鳥が出会った出来事から、その鳥は無事を確認しにきた実母の化身だという物語を紡ぎ、そのおかげで彼は自分が何者かを思い煩わないで生きてきた。

ある夜、《私》は偶然と運命について妻と語り合う。自分が死んだ後の妻の孤独を考えると、《物悲しくてだれかにもやみくもにしがみつきたくな》(二七六頁)。翌朝になり、物音をたてていたのが雨樋に引つかかった白いダイサギとわかると救出を試みるが、命を助けられない。《わたし》はその鳥に無言のまま死んだ母の姿を重ね、庭に埋めて成仏を祈る。妻は「これで、この家はお父さんの家になったね」と言った。《私》は娘や息子が神に無関心のままでいるだろうことを半ば確信し、自分と妻がこの家と土地の最後の人間になるはずだと考える。

この短編における虚は、被爆直後に原子野で拾われた語り手の戸籍、そしてぼつかりと穴があいたような養父の精神に表現されている。《彼の内面の葛藤の波紋が後には私にも伝わり、養父が死んで十二年にもなりますが、もしかしたら波紋は私の内でもひろがっているのかもしれませんが》(二五七頁)というように、虚から虚への反響も比較的直截に描かれた。

乳児だったため被爆者としての記憶はなく、また自分が知る全てを書きとめる証言者でもないところに《私》の周縁性が浮かび上がるだろう<sup>(13)</sup>。また、自らの神を浦上天主堂に強く意識するが、実は浦上キリシタンの子孫かどうか確定しないという点も、彼を

迫害されたキリシタンの中心的な位置から外す要素といえる。

物語の展開において、幼い頃に会った白い鳥、実母、死んだダイサギのイメージがよく似たものとして次々と連なっていくのも分かりやすい。短編「虫」に登場した「まだ、生きておるね?」と問うウマオイも、「ダレダ?」と問うダイサギとの類似性においてここに隣り合うはずである。

白いダイサギは実母だというように、偶然でなく縁があつたとみならずことは曲がりなりにも人と世界を繋ぐ。そのような語り手の認識において、素朴な信仰は物証なしに成立しているといえよう。一方、子供たちには神を見失つたままにいるという異なるイメージが付与され、世代を経ることによる虚の反響の弱まりが見通されている。超越的なものとの関係は特定の世代に限定され、つまりは相対化されているのである。

この連作の終着点において、読者の関心は、中心たる土地の虚のうち主に浦上キリシタンの信仰の光景へと導かれた。ただし、クローズアップされているのは代表的な当事者と言いつても、人間の姿である。彼の素朴な信仰心がリアリティをもちうるか、また様々な信仰者やそれ以外の人間にも一般化されるかという点について決定的な答えは示されず、最終的な判断は読者に委ねられているといえそうである。

#### 四、隣接性による周縁形成、充填されていく中心の虚

本章では、前章で短編ごとに確認した連鎖するイメージを、他作品も取り上げつつ隣接性という観点で整理する。それらが周縁

の形成に果たす役割をとらえるため、冗長な内容にしばしお付き合いいただきたい。<sup>(14)</sup>

まずは、原爆被災とキリシタン迫害という二つのテーマが、火のイメージにおいて近接させられていることを押さえておきたい。実際のキリシタン迫害において、斬首・餓死・病死も多数記録に残るが（とくに初期は斬首による処刑が主だったが）、青来作品に登場するのは圧倒的に火刑である。『爆心』に限ってみても、「釘」のお良さんが語った先祖の火炙り、「石」の山森の母が話した先祖の火炙り、また山森によると浦上川の石が熱いと訴えること、「虫」の廣瀬の祖母の会話にあつた先祖の火炙り等が目につくだろう。また、「蜜」の不倫という火遊びが被爆と隣接することも前に述べた。

原爆被災およびキリシタン迫害という中心的な出来事に対して、『爆心』の主立った人々はそれぞれ周縁に位置していたが、そのような人物像は他作品にも見受けられる。「ジェロニモの十字架」の叔父と僕、「雪の聖地」の知的障がいを持つクリスチャン青年、「聖水」のいかがわしい教祖、「てれんばれん」（『文學界』二〇〇七年七月）の父の被爆体験をほとんど知らないが、不思議な力を継承しているらしい語り手、「余命零日」（『文學界』二〇一〇年七月号）の隠れの末裔であるらしい、長崎原爆の際は雲仙にいた父、連作「人間のしわざ」「神のしわざ」（『すばる』二〇一二年一月号、二〇一三年一月号）に登場する、精神バランスを欠いた戦場カメラマンなど。

それらの登場人物たちはたいい虚を抱えた存在であり、「聖縁寺のサンタマリア」（『新潮』一九九七年二月号）の住職や「プー

ゲンビリア号の船長」(『文學界』二〇〇九年四月号)の和章など、虚を自覚する人物はそのほかにも少なくない。また虚は人間だけに宿るわけではない。例えば、「鳥」の語り手と重なる「椿崎礼拝堂」(『文學界』一九九五年一月号)の組合長の戸籍の空白、「釘」の納戸、「石」の天国、「虫」の白磁のマリア、「蜜」の梅の古木や祭壇の部屋、「貝」の貝殻、「人間のしわざ」の息子の部屋など。とくに「古木の虚」のイメージは、二〇一八年発表の「フェイクコメディ」(『すばる』二〇一八年九月号)にも登場して連鎖を伸ばしている。

「蜜」に描かれたように、古木の虚は暴かれるものでもある。秘密を暴くという要素もまた、隠れキリシタンの信仰を暴く、親の被爆体験を暴く、という二つの行為をイメージ上で結びながら、「椿崎礼拝堂」のビデオをはじめ、「釘」の探偵社や納戸、「石」のスキヤンダル、「虫」の手紙、「蜜」の古木の虚やキウイや奥さんの陰部、「余命零日」の死者の秘密、「人間のしわざ」の息子の部屋といったかたちで、様々な作品に散りばめられている。暴かれる秘密の一つであるキウイのように、毛でびつしりと覆われたものは、キウイに似た奥さんの陰部のほか、「聖水」のガラス片が刺さったタイサンボク、「釘」の納戸、「虫」のガラス片を磁力で吸い寄せたような左脚、「スズメバチの戦闘機」(『文學界』二〇一〇年四月)の蜂に刺された肌などが数えられる。

木に刺さったガラス片は「聖水」において蜜に喩えられ、「石」の母の目やにがこれに隣り合う。「蜜」において蜜はキウイや奥さんの香りとして前景化され、「フェイクコメディ」ではトランプ大統領の香りともなった。人を惹きつける甘い匂いの繋がりと

しては他にも、「椿崎礼拝堂」の鯨糞をはじめとして、「聖縁寺のサンタマリア」の土から立ち上る香りや、「芳香」(『文學界』二〇〇七年二月号)の瑠璃子の肌の匂いなど枚挙に暇がない。

「蜜」では男子学生たちが蜜に寄ってくる虫に重ねられたが、被爆地でも生殖する生命として作者が関心を寄せる虫のイメージは、「聖水」の祈るような精霊の姿、「釘」の神にすぎた父、「虫」のウマオイみたいな抱き合う男女、「言葉の蟻たち」(『文學界』二〇一〇年一月号)の活字、「余命零日」の魂であり言葉でもある虫、「人間のしわざ」の虫のように抱き合う男女など、やはり様々な対象と結びついて登場する。

最後に挙げるのは、何かにしがみつく、何かを捨てるという行為である。これらもまた、信仰をその対象とするイメージを主軸に作品間にわたって散見される。前者は、「聖水」の奇蹟にすぎた人々、「釘」の妻にしがみつく息子や、神に虫のようにへばりつく父、「石」の幼なじみや女性新聞記者を頼りの綱にする山森、「虫」および「鳥」の急に誰かにすがりたくなる語り手たち、「芳香」の男性と神の両方にすがった瑠璃子、「てれんばれん」の力を信じるのでなくすがりたいという加藤さんなど。後者の拾われるものは、「ジェロニモの十字架」の十字架、「椿崎礼拝堂」の漂流物、「聖縁寺のサンタマリア」のマリア像、「貝」のゴミと貝殻、「鳥」の拾われ子とその子が後に意識する神との関係、「芳香」の聖母子像など。しがみつく対象は異性であったり、拾われる対象は海からの漂流物だったりというように、必ずしも神への信仰に限定されない、より幅広いイメージを喚起しながら連鎖するものとなっているだろう。

ここまで羅列してきた様々な要素は<sup>(15)</sup>、偶然のように隣接するもの、差異をはらみつつ反復するものとして、周縁にあたる場を言葉で肉付けしている。ばらまかれた要素は、「これとこれは同じである、あるいは正反対のものとして照らしあう、あるいは原因と結果の関係である」といった論理的な繋がりが確定しない。少なくとも『爆心』の時点では、因果関係に回収するという意味での論理性（それは物語の叙述にとって不可欠でもある）と、ただ隣り合っているだけという隣接性との間で、論理的な整合性の方に大きく偏らないようバランスがとられているようにみえる。それゆえに、抽象的な点や線でなく、具体的に物理的な場が周縁として生み出されているのではないだろうか。読者が自分自身の生活の場、そこで出会う釘や石や虫やキウイや貝殻や鳥をよく似たものとして作中のそれらと隣接させる可能性は、ここにかかっている。

その一方で、読者がイメージの連鎖に必然を見出そうとすれば、その態度は（青来作品における）信仰に通じることになるとも考えられる。前述したように、『爆心』は信仰の問題に読者を誘いながらも決定的な答えを示さず、信仰を相対化するような部分を残した。それでも、謎解きに導かれた読者は謎を解いて虚を充填することを欲するだろう。虚の中身が信仰の意味内容でもって充填されれば、虚から虚への反響は——「鳥」の末尾で予想されたのとはまた別のかたちで——消失することになる。

実際、『爆心』以降の青来の作品や発言においては、「周縁を肉付けされた虚の内実＝普遍的な信仰の意味」という構図が強まっていく。《幼い私は神を知らぬうちに捨ててしまったのではない

か》（二八二頁）という「鳥」の浦上キリシタンの末裔かもしれない語り手の信仰をめぐる問い。二〇一一年にデビュー作について問われた青来が、《私たちは特定の神様を忘れて生きてきた人間じゃないのか》<sup>(16)</sup>と語った自身の問題意識。そして、二〇一三年に母校の長崎大学広報誌上で示した《人間と神と信仰の関わり——人間は神様を棄ててきたのではないか》<sup>(17)</sup>という作家としてのテーマをめぐる発言。この三つを並べると、神を捨てた主体がフィクションな一個人から人間へと普遍化されていくのがよくわかるのではないだろうか。

また、とくに「人間のしわざ」（前出、二〇一二年）以降、作者は浦上・長崎の問題を世界各地の紛争地の問題に連結させ<sup>(18)</sup>、人間の暴力性と倫理の問題へと一般化するなかで、普遍的な信仰の有り様を捉えようとする方向に進んだ。「暴力に晒され続ける人間にとって神はいかなる存在か」という問いは、「神は無力であり、それによって人間の自由があらゆる面で可能となっている」という解とセットで語られるようになる<sup>(19)</sup>。ここにおいて、中心と周縁の虚の反響には、作者自身によって一つの終止符が打たれたといつていいだろう。

## 五、土地の記憶が限定的に実体化されることの危うさ

さて、浦上・長崎をめぐる青来の言説を追うなかで気になる点があったことも報告しておきたい。まず、二〇〇一年の鼎談における《浦上という土地を舞台にして小説を書く」と、カトリックの殉教の歴史と原爆は自然に登場することになってしまいます<sup>(20)</sup>。

という発言。ここには、浦上・長崎をめぐる限定的な認識を自明のものとする作者としての姿勢がうかがえる。それと無関係でないのが、土地の記憶がその場所に実体として存在し続けているかのような発想である。例えば、カズオ・イシグロが長崎原爆を一度書きながらそれ以降テーマとしなかつた理由について、《彼は長崎を離れたことで、押し寄せてくる土地の記憶から自由でいられた面もあったのでは》<sup>(21)</sup>ないかと青来は述べている。土地の記憶を土地に所属する実体とみなす思考は、小説の表現にも読み取ることができよう。長崎を舞台にした二〇一一年発表の「惑乱」では、突然命を絶たれたものの声が聞こえるようになった女性が、祖母に教わったこととして次のように語った。《ちようど骨が残されてだんだんと滅んでいきながらもいつかだれかにひよつこり掘り出されるように、声も長くその土地に残って、何百年も、何千年も、いつまでも響くのだから》<sup>(22)</sup>

土地の記憶を限定的に実体化することは、危うさを伴う。二〇〇八年発表の小説「一万年のパートナー」では、故郷に残る潜伏キリシタンの集落を調査する主人公によって、集落にはじめてキリスト教信仰がもたらされた場面が考察されている。彼は五島にクジラへの信仰の痕跡が残ることを知ると、《クジラを神と崇める人々の心にカトリックの信仰がひろがっていったとき、古い神であるクジラにはなにが起きたのだろうか》<sup>(23)</sup>と自身の問いを進めていった。ここに、仏教信仰と仏教への弾圧の記憶が欠落していることは明らかだろう。例えばこのことをどう考えるのかということが新たな問題としてみえてくる。

浦上の歴史はこれまで、キリシタン布教を起点に語られること

が常だった<sup>(24)</sup>。青来も、浦上天主堂の歴史を説明するにあたり浦上について述べる際は、やはりイエズス会に寄進された一五八〇年代から始めている<sup>(25)</sup>。しかし、それ以前から浦上が存在していたことは言うまでもなく、ここでは様々な事件や人々の争いも起きてきたはずである。キリシタンの村となる前の浦上について、古文書等で確認できる出来事を簡条書きで幾つか挙げる<sup>(26)</sup>。

・ 鎌倉時代には、浦上氏という肥前国彼杵郡浦上村を本貫とする土族（御家人の家系）の存在が確認される。一二二〇年、福田と浦上の境界争いが生じ、福田兼信が浦上内の塩屋（製塩施設）に放火し消失させた。

・ 室町時代の一揆連判状（一三七二年）から、浦上村の土族（浦上氏・中野氏・家野氏・洲氏）が彼杵一揆に加盟したことがわかる。彼杵一揆は軍事的な性格が強く、南北朝の動乱のなかで結集して北朝方と戦うために結ばれた（一三六三年）。後に北朝方が優勢となると、北朝方に参加すべく一揆連判状を作成（一三七二年）。彼杵庄内の結束を保つことは容易でなく崩壊にむかうが、その過程で浦上中野美作守と福田大和守が合戦を繰り返したことも文書に残る。

・ 一五六七年頃、キリスト教が伝わる。一五七四年、大村純忠が全領民をキリスト教へ改宗させるべく寺社破壊を徹底した。僧侶たちは領外へ立ち退き、中には殺害された者もあったという。浦上地区では浦上北村の神通寺、六地藏、岩屋山大権現がキリシタンにより破壊された。

この他にも、自然災害や逆に多くの人々を明るくさせた出来事など、様々なものが土地の記憶でありうるはずである。つまり、「キリシタン迫害と原爆被災」が特別に自明視されているとすれば、それは人間側の都合と取捨選択の結果なのだろう。報告では参考までに、セファルディム系ユダヤ人の国籍取得が二〇一五年に承認されたことについても付言した。彼らがカトリック勢力によってスペインやポルトガルから追放されたのは一五世紀のことである。一六世紀の浦上の出来事を私たちが忘れているとすれば、それが古すぎるからでなく、私たちの都合で目を向けてこなかったからだということを変更して確認しておきたい。

## 六、まとめと課題

最後に、議論のテーマになりそうな点など補足しつつ四項目でまとめる。

① 周縁は中心たる虚に目を向ける者の足場といえる。その周縁はいかに形成されているかという点について考察した。長崎・浦上という土地の記憶（キリシタン迫害、原爆被災）が、それ自体は捉えがたい虚でありながら、それに自身の虚を揺さぶられる周縁の人々によって感知され媒介される——そんな構図のもと、「具体的なイメージの連関にズレをとまなう物量を与え、捉えがたい何かのまわりを創出すること」が目論まれているのではないか。また、読者は様々な要素を読みとり関連付けることで周縁形成に参

加すること（作中のみならず、日常の身のまわりの要素、あるいは自分自身を隣接させること）になるのではないかと問題提起した。

② 『爆心』以降のテーマは、浦上・長崎に固有の記憶から普遍的な信仰の有り様を問うことへと力点を移し、さらには断片化された私小説的手法への移行が試みられているようである。報告者は、土地の固有性がキリシタン迫害および原爆被災の記憶をめぐり問題化されること（それらを切り口に対象化しつつ、同じ土地をめぐる別の記憶と突合したり、他の土地の固有性をめぐる語りと関係づけたりという多様な試みがなされること）に期待を寄せる一人であり、青来の初期テーマは追求の余地が残されているのではないかと考える。

ただし、土地の記憶を特定の記憶と直結させて実体化するような説明（特定の悲劇が、時を隔ててその地の人間のかなかに甦る記憶であり、客体として存在しつつづける土地の記憶であるという語り口）には警鐘を鳴らしたい。例えば仏教弾圧を忘れることで浦上・長崎の記憶は基本的に受難側のものとなり、一五八〇年代より前の出来事は含まれないことになってしまふからである。虚が虚であることに耐え、対象の実体化を避けつつ、初期テーマが再び展開されることを期待したい。

③ 今回取り上げることができなかった分析テーマの一つは、作者の商業ジャーナリズムに対する姿勢がある。青来は二〇〇一年の鼎談のなかで、浦上・長崎について考える

ときキリシタン迫害と原爆被災がテーマとなるのは自然な

ことであると主張していた。また、それが現代的に多くの  
人々の認識枠組みとなっており、出版側や読者側の期待も  
そこにあるという事実を重視していたようである<sup>(27)</sup>。商業  
ジャーナリズムで通用するよう、リアリティを備えつつ既  
存の認識枠組みを活性化することが一つの目標とされた結  
果、過去の出来事に目を向けるよう促す一方、何者も糾弾  
することがなく、被曝の悲惨さには焦点化せず、観光・行  
政の言説と齟齬を来さない、という特徴をもつに至ってい  
るのではないか。この点については機会を改めて考察した  
い。

④ 最後に、被曝の後障害がどのように語られているかとい  
う点は議論になるうするため、メモ程度に整理しておく。『爆  
心』において放射能の影響は目立たないかたちで語られた。  
例えば「虫」では、被爆した廣瀬が衰弱や脱毛から順調に  
回復する姿が描かれる一方、後に知り合いが自殺した原因  
に被曝の影響が仄めかされている。また「鳥」では、語り  
手の体調変化に血の繋がらない養父との繋がりが想起され  
ても、乳児だった自身が直接受けたはずの放射能の影響に  
は全く言及がなかった。養母が授乳によって被曝させた可  
能性を恐れていたことが想起された際も同様である。被爆  
二世の一人人として身体的な影響を感じてこなかったとい  
う作者が<sup>(28)</sup>、この問題に深入りせず慎重に言及しているこ  
とがうかがえる。被曝の影響をどう描き描かないかについ  
ては、様々な属性を有する同時代の作家たちを含め比較検

討することが課題となる。

## 注

- 1 《わたしは地上五百メートルの中空の青いほんとうの爆心あたりに  
ぼんやり視線を漂わせました。》(『蜜』『文學界』二〇〇六年一月号  
／『爆心』文藝春秋、二〇〇六年一月、一七一頁)
- 2 《爆心地の上空五百メートル、そこがほんとうの爆心だというのが、  
それはいつたいたどの一点かと菜穂子は窓から空をながめたことがあ  
った。》(『雪の聖地』『文學界』一九九七年六月号、一八九頁)
- 3 《僕の体内には大きな空虚が広がっている。折れた古木にしばしば  
見られる大きな虚。》(『ジェロニモの十字架』『文學界』一九九五年  
六月号／『聖水』文春文庫、二〇〇一年二月、一四頁)
- 4 孟蘭盆に帰郷したジェロニモ叔父を見て親族らは「ああ……」「お  
お……」と声を発する。《それはそれぞれが抱え込んでいる空虚に  
互いの唸りが反響しあうように聞こえる。この人々の体内にも同じ  
虚が広がっていることを僕はひっそりと感受した。》(『ジェロニモ  
の十字架』一五頁)。また小説末尾で語り手は浦上行き電車に乗  
り、そこで死者の気配を濃密に感じる。《じつと耳を澄ましている  
と、だんだんと、この地全体が、さまざまな過去の残響に震える巨  
大な虚のようにも感じられてくるのだった。》(六八頁)。
- 5 「雪の聖地」の菜穂子は、知的障がいをもつクリスチャン青年と心  
を通わせるなか、冬の爆心地で雪を食べる死者たちの気配を感じる。  
「聖水」の僕は信仰に冷淡でありながら、隠れキリシタンの裏切り  
者と被爆者の記憶をもつという親戚、およびその親戚を信じる父を  
介して、土地の精霊の存在を感じる。

6 本文で述べたように、アウシュヴィッツにおける歴史的大虐殺をめぐり、「忘却の穴」「語り得ないもの」「表象不可能性」に日本国内でも注目が集まるようになった。それに至るまでの大きなトピックとして、ハンナ・アーレント『全体主義の起源』（一九五一年／一九七四年日本語訳、一九八一年新装版刊行）、クロード・ランズマン監督『シヨアー』（一九八五年／一九九五年日本公開）、高橋哲哉『記憶のエチカ』（一九九五年）、ヴォイドを特徴とするベルリン・ユダヤ博物館の開館（一九九九年）はよく知られる。なお、右のそれぞれにおいて証言や表象が全否定されたわけではない。

7 ジョルジョ・アガンベンは『アウシュヴィッツの残りのもの——アルシーヴと証人』（一九九八年／上村忠男・廣石正和訳、月曜社、二〇〇一年九月）で『アウシュヴィッツは「言語を絶する」とか「理解不可能である」と言うことは、*euphemism*、すなわち沈黙のうちにそれを崇めることに等しい』（三九頁）と述べ、《証言にたいする終りのない注釈》によって『欠落に耳を傾ける』（一〇頁）ことを自らに課した。またジョルジュ・ディディエールユベルマンは『イメージ、それでもなお アウシュヴィッツからもぎ取られた四枚の写真』（二〇〇三年／橋本一径訳、平凡社、二〇〇六年八月）で『集団殺戮の「不可視性」についての行き過ぎた一般化』（三八頁）を批判し、残された写真を分析した。

8 例えば「愛撫、不和、和解、愛撫の日々」（『文學界』二〇一四年三月号）。

9 父が離れの納戸の中まで確認しようとしたのは、かつてお良さんのきれいな指がさがされていた火鉢の存在を思い出したからだった。また、納戸の戸は指の脂で鈍く光っていたと描写される。つまり、

読者の視線をお良さんの指へと誘導し、その指がその場所ですていたことを想像するよう促す語りとなっている。

10 黒井千次・稲葉真弓・佐川光晴「2005.7.19 創作合評」『群像』二〇〇五年九月号）

11 松田繁郎「青来有一「爆心」再考——死者と未生の人々への語りかけ」（『民主文学』二〇一七年八月号、一〇二頁）

12 《鋭い光が放たれた後は、たちまちに骨になってしまおうのか。それとも老いてしまいうまで長く苦しむのか、わたしはそれを占いたいのです》（一四八頁）という美穂子の不倫にたいする感慨は、まるで被爆（被曝）のことを語っているかのようであり、イメーじの上で不倫と原爆被災を隣り合わせる言語行為として解釈できる。

13 《私》は体験記の執筆について、養父の賭け事の件は自分の文章を歪ませるため省略するという。何を書き何を書かないか操作する姿は、彼が客観的で正確な証言者という位置にいないことを表しているだろう。

14 例えば、楠田剛士「青来有一「爆心」の家と人——離れ・ゆるみ・軋み・崩れ、あるいは連結とリフォーム——」（『国語と教育』三七号、二〇一二年二月）が前景化した家屋や家族をめぐる表象の繋がりもまた、隣接する要素に数えることが可能だろう。ただしここでは、より表面的で分かりやすい幾つかの要素に限り、それらが緩く広く連なる様子を可視化しようとした。

15 六つの短編タイトルも同様に、隣接の関係といえる。どれも漢字一字で、訓読みすると二音であり、イの母音で終わるところに類似性をもつ。しかし、意味内容において関係性を整理することは難しい。それらの並びが何らかの意味ある文章を構成するわけでなく、

また自然界のものと人工的なもの、硬いものと柔らかいもの、冷たいものと温かいもの、重いものと軽いものといった二項対立において六つの要素のバランスがとられているようでもないからである。目次に可視化されているように、それらは中心から距離のあるものとして、ただ隣り合っているのだろう。

16 青来有一「長崎からの問い掛け」(『中國新聞』二〇一一年八月二二日朝刊)

17 青来有一「長崎大学は初めて爆心地と地続きになった」(『CHOH』二〇一三年四月、一六頁)

18 《ポーランドの強制収容所で腫が瘤のようにふくらんで見える瘦せきった八歳の子どもが飢え死にしていくなも人間のしわざであり、原子爆弾で全身黒焦げになった乳飲み子を抱えた母親が赤ちゃんを抱いたまま死んでいくのも人間のしわざであったとしても、では、そのとき、神さまはいつたいどこにいらしたのか?》(『人間のしわざ』「すばる」二〇一二年一月号／『人間のしわざ』集英社、二〇一五年四月、六三頁)。この作品では、ソマリヤの内戦、チエチェン紛争、世界貿易センタービル崩壊等も、戦場カメラマンが見てきた暴力の現場として並立的に言及される。

19 《神がそのために口をかたく閉ざして、自らを完全な無力にまでおいてこんで守ったものが、残酷性もふくめての人間の自由だと思いたるなら、私たちが虐殺の時代にことごとく失ってしまった人間性や倫理も、自由のなかにふたたび発見することができるかもしれない。「人間のしわざ」を黙って見つめている神の無力さのなかに逆説のように隠された神の愛の深さがわかれば、(※後略)》(遠藤周作と長崎——神が無力になるところ)『三田文学』九三巻一一八号、

二〇一四年八月、一九四頁)

20 青来有一・田崎弘章・田中俊廣「鼎談「長崎」を超えて」(『紋説』二〇一一年八月、五四頁)

21 「カズオ・イシグロが描いた長崎 ゆかりの地たどる 記憶もとに自らに創造」(『朝日新聞』二〇一七年一月二二日朝刊)

22 青来有一「惑乱」(『文學界』二〇一二年七月号、八一頁)

23 青来有一「一万年のパートナー」(『文學界』二〇〇八年四月号／『夢の栓』幻戯書房、二〇一二年八月、三一〇頁)

24 《浦上(うらかみ) 長崎市の北部を占める地域。西の岩屋山と東の金比羅山に囲まれた小盆地にあたり、中央を浦上川が南流。名称は旧浦上山里村であったことに由来。慶長年間(1596～1615) 以前のキリシタン布教地で、禁教後も信仰は続き多くの迫害を受けた。(※後略)》(『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典 1』フランク・B・ギブニー編、ティビーエス・ブリタニカ、一九七二年九月、四六三頁)

25 《一五八〇(天正八)年、長崎の領主、大村純忠は長崎の地をイエズス会の知行地として寄進した。当時、長崎の北方にあった浦上村は、大村純忠の甥にあたる島原地方の領主、有馬晴信の領地であった。一五八四(天正一二)年、有馬晴信も浦上村をイエズス会に寄進する。》(青来有一「浦上天主堂の原爆による破壊」『宗教と現代』がわかる本 2008 『渡邊直樹編、平凡社、二〇〇八年三月、二二八頁)

26 『新編 大村市史 第二巻 中世編』(大村市史編さん委員会編、大村市役所、二〇一四年三月)、外山幹夫『史料で読む長崎県の歴史』(清文堂、一九九三年六月)、『市制百年長崎年表』(市制百年長崎年表編さん委員会編、長崎市役所、一九八九年四月)を参照してまとめ

た。

27 「鼎談「長崎」を超えて」(注 20) のなかで、《外から見た目を無視して、もう関心がないとあつさり投げ捨てられるかというところ、商業ジャーナリズムの中ではちよつと難しい。あらかじめ創られた長崎のイメージがある以上は、それをどこかで引き受けて、逆転するというをやらざるをえない。(※中略) 現実的な話になります。が、「聖水」を発表する前に佐賀を舞台にした作品を書きましたが、編集の方は納得してはくれなかつた。》《小説を雑誌で発表すると、どういうことが期待されるかというところ、僕がよく言われるのは、出島殺人事件でも何でもいいから、長崎を舞台に売れる作品を書いてくれと言われます。(※中略) 実際の読者はそういう人がほとんどです。》(五七、六一頁)と発言した。

28 「鼎談「長崎」を超えて」(注 20) のなかで、《被爆者は悲惨じゃなければならぬという固定観念があり、被爆二世というもの、どこか病弱なイメージが塗りこめられてしまっています。実際、僕は被爆二世になりますが、それで特に何かを感じたことはない。被爆二世の福祉政策を確立していく運動と一緒にしようかという意識もありません。それが長崎の現在だろうと思う。》(五〇頁)と発言した。